



追悼文



David Allis 博士 (1951-2023) の思い出

平野達也 (理化学研究所)

エピジェネティクス分野の発展に多大な貢献をされたロックフェラー大学 David Allis 博士の突然の訃報が世界中の研究者を驚かせました。逝去されたのは、2023年1月8日とのこと。享年71歳でした。

私自身は、染色体研究に従事しているとはいえ、エピジェネティクス分野に深く関わっているわけではありません。博士の優れた業績を語ることにについては他にも大勢の適任者がおられると思いますが、アメリカで研究者としてのキャリアを開始した際に Allis 博士と接する機会を得たものとして、その思い出を文章に残しておくことも無駄ではないと考えた次第です。

Allis 博士は、2003年にロックフェラー大学に移り研究を大きく発展させましたが、必ずしもエリート街道まっしぐらのキャリアを積んできた研究者ではありません。多くの研究者に賞賛されている彼の人物というのは、苦勞人ゆえに培われてきたものであるとも言えるでしょう。絨毛虫テトラヒメナを材料とした(当時としてはとても地味な)ヒストン生化学が彼の出発点ですが、ロックフェラー大学に落ち着くまで実に4つの大学を移っています。

Allis 博士と私の接点は、1994年夏の Gordon Research Conference (ニューハンプシャー州 Tilton School 開催) に遡ります。現在では "Chromatin structure and function" と名を変えています。当時は "Nuclear proteins, gene regulation and chromatin" と呼ばれていました。カリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) の Tim Mitchison 研究室のポスドクだ

った私は、分裂期染色体構築に関わる新しい因子 XCAP-C/E を見つけて、この学会でポスター発表をする機会を得ました。それは数ヶ月後に Hirano & Mitchison (1994) Cell として論文発表することになる内容でした (XCAP-C/E は、現在の理解ではコンデンシン複合体のコアサブユニットということになります)。Allis 博士とはその時が初対面でしたが、「この素晴らしい研究が、なぜトークではなくポスターなんだ」と声をかけてくれたことを今でも鮮明に憶えています。私は無名のポスドクであり、クロマチン分野は当時のボスの専門外だったので、論文発表前のその仕事が学会の主催者に知られていなかったのは無理もなかったのですが。

一年後の1995年夏、私はニューヨーク郊外のコールドスプリングハーバー研究所で独立することになりました。その最初の National Institutes of Health (NIH) グラントの審査に関わったのが Allis 博士であったことを、翌年の春、彼が当時所属していたロチェスター大学にセミナーに呼んでいただいたときに知りました。そして、その訪問時に彼のデスクの上に載っていたのが Brownell et al (1996) Cell の校正刷。テトラヒメナから精製したヒストンアセチルトランスフェラーゼが酵母遺伝学で同定されていた GCN5 のオルソログであることを報告した歴史的な論文です。改めて記録を調べてみると、私がロチェスターを訪問したのが1996年3月19日、その論文が Cell 誌に発表されたのは1996年3月22日ということになります。そのとき私が目撃した出来立ての論文から modern epigenetics が始まったことは、このページの読者の方々に



としては周知の事実です。

その後 Allis 博士がヴァージニア大学に移籍してからも一度セミナーに呼んでいただくなど、常に親しくさせていただくと同時に多くの励ましを受けました。同じ組織に属したことはありませんが、私にとってのアメリカにおけるメンターのひとりであると言っても過言ではありません。

この文章を準備するにあたって、Brownell et al (1996) Cell に目を通して見たところ、謝辞の欄に以下の文章が置かれていることに気づきました。

C.D.A. acknowledges the confidence the NIH have shown in our ability to approach this problem using Tetrahymena as a model.

Allis 博士は複雑な思いとともに強い自負をこの一文に託しているように感じます。それでも、織毛虫という地味な材料を使った研究がガン治療をも視野に入れる巨大な分野に成長するとは、博士自身もこの時考えていなかったに違いありません。しかし、そうした基礎研究をサポートする体制がいかに重要であるか、私たちは改めて考えてみないといけません。

Allis 博士は過去 10 年に渡って闘病していたけれども、大学や同僚には一切そのことを伏せていたとのこと。ここに改めてご冥福をお祈りいたします。

2023 年 2 月 2 日

日本エピジェネティクス研究会事務局

群馬大学 生体調節研究所

生体情報ゲノムリソースセンター

ゲノム科学リソース分野内

庶務担当幹事：畑田出穂，担当：岩田浩美

住所：〒371-8512 群馬県前橋市昭和町3-39-15

TEL: 027-220-8111

E-mail: jse-jimukyoku@ml.gunma-u.ac.jp